

南の瓦房

園稚幼店房瓦洲滿

枝美中田

今年は五十五年振りの寒さが来ると云ふことですので、一體どんなでせうと思つてゐるのですけれど、何時までも暖かくて十二月の八日と云ふのに、雪の後しとしと雨が降つたり、お砂場で長いこと遊べたなど本當に珍らしいことでした。でも時々寒い日があつて此の間の朝は九時に零下十度でした。十時になつて零下八度、それでもラデオ體操は外でします。僅かの間なら寒氣の中で身が緊張つて體によいさうですから外套も何もなしで出ます。第二の頃から手が針で刺される様に痛くなつてだん／＼酷くなるのですけれど、皆元氣を出して五つの子も頑張つてやつて居ります。風の吹く時は尙寒さが身に染みるので

すが、内地の様な濕つぽい寒さとは違ひます。こんな事自慢さうに申しても北滿の方と比べましたら何でもないことです。早くスケート場に水を入れたいと、皆もつと／＼寒くなるのを待つて居ます。池ではもう滑つてゐるのですけれど、學校の運動場一杯に土手を造つてスケート場が出来るのです。

毎日お辨當の前に背外出の支度をして、餘り風がひどくて寒さも酷しい時には、此のスケート場を一廻り駈けて來るのです。暖かい日には山が川か、たまには池の方へも出掛けます。春夏秋毎日出掛けた山ですけれど、冬になつても暖かい日には三十分か、一時間近く遊び歩いて來ることもあります。運動場の横が小川で橋を渡ると直ぐが山ですから、幾つもの山を彼方此方と、鐵柵を傳つて登つたり、狭い涯道を歩いて、石ばかりの急な所を四這ひになつて攀登つたり、谷間への細い道を迂り降りたり、鐵砲なども持つて出掛けたり、皆兵隊さんになつて進むのです。

秋には毎日お辨當を持つて登つた山、ど

んぐりを拾つた山、「アシア」や「ほど」長い／＼貨物列車も見下した山、柏餅の柏のある山、初茸の出る山、綺麗なお花も摘んだ山、時々兎が飛び出して駈けて行きます。龍冠山の頂上には岩が澤山突出してゐて、それが馬になり駱駝になります。ライオンも虎もゐます。「先生蛙がゐるのよ」と教へて呉れたのも子供二人其の背中に乗つてゐる岩なのです。本當に蛙が兩手をついた恰好そつくりです。此處から西の山を寫生もして見ました。

河をじゃぶ／＼渡つて遠足に行つた遠い西のお山が見えます。毎日お山へ行かうと云つた子供達です。川の上には土筆が澤山出ますし、春の野の花が咲き亂れます。おたまちやくしを汲ひ、とんぼを追ひ、笹舟を浮べ、目高や鮒や、小さな蝦や、泥鰌まで掴へた川、其の川に水が張つて、水の澄んだ水の中に、遊いでゐるのが見えるましたけれど、今はすつかり厚く凍つて了ひました。小さな水溜りが薄く眞白に凍つた所は、ばちん／＼と踏み割つて歩き、廣い所では多勢乗るとばり／＼ぱりと、物

凄い音を立て、稻妻の様にひと割れ、驚いて飛び出しては、雷の様だつたねと喜んでしました。其中うっかり一人が足を突き込んで長靴を濡したので、それからには要心して身代りに大きな石を投入しては、面白い音を聴いたりしてゐます。もう此頃は平氣で滑つて歩けますが。

時々山から満人の小さい部落の方へ降ります。百姓家のひるげのかまどを見させて貰ひました。粟を煮てゐます。鶏が走つて家鴨が體を振り／＼寄つて來ます。大きな豚が側へ寄つても平氣で寝てゐます。起き上るとぶ／＼と小さい尻尾を振つて歩き出す、子供達も棒切を拾つて尻尾にして、ぶ／＼／＼言ひながら歩いて行きます。これもお晝の御飯を食べてゐる牛と驢馬を飽かす眺めです。高梁や玉蜀黍をころり／＼とろはが挽く大きな石臼が休んでゐます。

満人のお婆さんが、小さい男の子を連れて歩いて來ました。このお婆さん、木の枝切につけた大きな日の丸の旗を持つてゐるのです。何だか嬉しくなつてお婆さんに笑ひかけましたら、お婆さんも顔を綻ばせ

て、何か一言云ふのですれど、聞き慣れない言葉なのでどうも分りません。でも分つた様な顔をして領いて居ますと、子供達が「先生何て言つたの」と聞きます。「お婆さんのお家にも日の丸の旗を立てますつて」

「さう」と又お婆さんを見上げ「家にも滿洲國の旗があるよ、誰の家でも日本の旗と滿洲國の旗立てるんだねえ」とうれしいことを言つて居ます。

苗甫と種鶏場が直ぐ近くにあります。可愛い澤山のひよこ、眞白の鶏、クローバの道、苺島と葡萄棚、林檎畑、小さい白い花が咲いて、秋には眞紅な實が輝くのです。梨も成つてゐました。杏の花が咲き、まんしうすみ、躑躅、れんぎよう、柳木にしもつけ、さんざしと、甘い匂のはまなすとライラック、藤の花も、春は一度に花が咲いて、若葉の緑とが美しいことです。さうして直ぐ暑い夏が來るのです。

今は何處も裸で、苗甫には大きい／＼穴藏が出來て白菜が天井まできつしり積んであまりす。

幼稚園の庭にも小さい穴藏を造り、兎の爲の野菜を貯へてをります。十二月九日昨日は又雨でしたが、今日は午前九時に零下十二度と云ふ急降下振りです、風が強いので流石に外で、ラヂオ體操も出來ません。室内の遊びは何處も同じと思ひますが、兵隊ごつこには軍用犬が活躍してゐます。お人形を負ふ帯を首に巻きつけて、四足になつて働いてゐます。ですから兵隊さんにお送りした慰問袋の中の手紙にも、「兵隊さん日本の軍用犬は死んだですが。僕も軍用犬になります」などと云ふのがありました。装甲自動車に爆弾も積み乗り込んで、日の丸の旗を立て、戦地へ進みます。支那の陣地や城も出來ますし、トラック、軍艦、戦車、飛行機と何時も續いてゐます。お人形遊びの女の子達の家が、時には野戦病院になつたりもして。

水栽培の支那水仙が大きくなつて、蕾も伸びました。この花が咲いたら畫き度いなわ、先生このお花咲いたらか／＼うねと言つて居ます。鉢植の球根類も芽が伸びました。

神「あなた方はどこからいらつしやつたの」

女A「お山のお山の向ふから」

女B「春の神様お迎へに來たのよ」

男A「早く櫻の花をさかせて下さい」

神様「さうして」

男B「早く一年生になり度いから」

神「それではお花を咲かせてあげませうね」

櫻のお花春ですよ、お山において春ですよ、お庭にお出で春ですよ。と三回に言ひながらお供の者と一緒に花ふぶきをまくと

同時にお花の子供登上、二人づゝでお花を造つてしやがむ

女A「まあきれい」

男二人「きれいだなあ」

神様「櫻のお花さん達さあ踊つて頂戴」

適當な踊り一回して又元の場所にしやがむと二匹の蝶登上その間を舞ふ

(レコードその他適當の曲) 舞つてゐる處で

—— 靜かに幕 ——

附

昨年五月から私のつまらぬ經驗發表をつゞけさせていたゞきました、この他「のらくろ」、「小鳥の學校」、「お花と蝶」等年少組用のものも短いお話のある一つのテーマを取つて造つて見ました、紙面にもかぎりのある事と存じまづ筆を止める事といたし

ます、以上のべましたものについてどうぞ御遠慮なく御批評なり御意見なりお聞かせ下さいませ様お願ひ申上げます。

(昭和十四年一月)

(三六頁より)

もう直ぐお正月です。風や羽子板なども出來ました。寒くなつても、皆小さい人も、遠い處の人も元氣で來ますことを嬉しく思ひます。時には泣いて來ることもありますけれど。お辨當の時は、熱くて持てない程に燻まつた御飯を頂けるのがうれしいことです。ラジエーターの上の箱の中に御飯だけ入れて煖めて居ります。漸くスケート場に水を注れ始めました。

北の方はどんなに寒いでせう。でも皆元氣でスケートに、橇遊びに此の冬を樂んで居るのです。南の瓦房にも愈々其の時が來ました。

十二月十三日

附、これをお記していたゞいた頃は十二月十日前後で、まだお寒くなりきらぬ時であつた様でございます。

東京でさへびり／＼するやうな今日この頃の酷寒、瓦房店のお寒さを遙かに想像いたして居ります。

(編輯部)